

奥能登内浦の戦国城郭と合戦



穴水湾から見るボラ待ち櫓と立山連峰（『図説 穴水町の歴史』表紙写真より）

令和6年1月1日の夕方に能登半島を襲った大地震は、特に半島先端部の奥能登地域に大きな被害をもたらした。古く中世南北朝期の能登国では、北半分の珠洲・鳳至両郡を「奥郡」と呼び、戦国期には、鹿島郡を「中郡」、羽咋郡を「端郡」とも称していた。したがって、奥能登の呼称は、中世の能登奥郡に由来するもので、地域の範囲は、珠洲・鳳至の郡域にあたる現在の珠洲市・能登町・輪島市・穴水町の二市二町をさしている。

また三方を海に囲まれた能登半島の海岸線は、日本海に面した「外浦」と、波静かな富山湾・七尾湾沿岸の「内浦」をもって構成されている。殊に長い歴史時代のなかで、地域の生産・流通などの主要な半島経済の基盤となしたのは、比較的耕地面積が広く、年間を通じて漁労生産や舟運の航行が可能な内浦沿岸部であった。ところで中世の奥能登では、内浦地域の主要な戦国城郭が、いずれも富山湾・七尾北湾を望む海岸段丘上に立地していたことに気づかされる。

穴水城の攻防と長連龍

奥能登の関門を扼する穴水城は、鎌倉御家人で鳳至郡大屋荘地頭の流れを引く、中世の北陸を代表する有

力豪族の能登長（長谷部）氏^{*1}の居城であった。穴水町市街地の南東方にあたる七尾北湾の穴水の入江に面した丘陵先端部に所在し、そこから城下の町並みと湾内に入りする船舶の様相が一望できる要衝である。本丸跡と伝える曲輪（平坦面）を中心に、5箇所の曲輪と腰曲輪・空堀跡など、遺構の残り具合も良好で、石川県内でも屈指の中世城跡とされている。

この城は戦国末期の天正5年（1577）に上杉謙信が能登に侵攻した際に、越後から兵船をもって海路奥能登に侵入した上杉勢によって攻め落とされた。しかし、翌6年8月に至り、御家再興を企てる旧城主長統連の三男連龍^{*2}が、地元穴水の土豪・鋳物師・百姓等の支援を得て、一時同城の奪還をはかるなど、激しい攻防戦が展開された。やがて上杉勢が能登から撤退し、天正9年（1581）に、織田信長の部将前田



『太平記拾遺』十五：長九郎左衛門連龍

※1 『平家物語』に登場する長谷部信連を祖とし、「長谷部」の一字を略称し「長」と名乗るようになる。
※2 上杉謙信による七尾城攻めの際、長連龍が織田信長の支援を求め安土城に向かっている間に七尾城が落城し、畠山氏とともに長一族は滅ぼされた。その後一人生き残った連龍は、信長から鹿島半島を領地として与えられ、前田利家の能登国支配を支えた。連龍の死後、長氏は三代前田利常の時代において知行3万3千石を与えられ前田家家臣となり、やがて加賀藩年寄「加賀八家」の一つとなる。

利家が能登の国持大名として入部すると、穴水城は利家によって修復され、奥能登支配の拠点とされた。

穴水町甲地内の甲山城は、富山湾と七尾北湾を画する大口瀬戸に近い、「阿曾良泊」と呼ばれた甲の深い入り江の良港を見下ろす位置に立地する。同城は戦国末期に能登を占領支配した上杉氏の水軍基地となっており、城将として饒田肥後・平子和泉・唐人式部が、上杉氏の舟手組(水軍)を率いて駐留し、穴水城をめぐる合戦では上杉方を支援するため、長連龍に加担した鋳物師の里である中居村を焼き討ちする動きもみられた。

■ 柵木城合戦と長景連

能登町宇出津港東側の海岸段丘(遠島山公園)に所在する柵木城は、奥能登最後の戦国合戦の舞台として知られる。天正10年(1582)5月、先に能登から越後に退去していた上杉氏の部将長景連が、突然海路奥能登に攻め込み、柵木城に籠城して周辺の民家に火を放った。

このとき能登の大名の前田利家は、織田信長の命をうけ、上杉景勝と戦うために越中国の魚津に出陣中であつたため、急遽配下の長連龍に1,000余騎の軍勢を率いさせて、魚津から富山湾を船で横切り柵木城に向かわせた。柵木城に到着した連龍は、海上から同城を包囲し、同族の好みをもって景連に投降を勧めた。だがそれに応じなかったため、5月22日早朝に、連龍軍は総攻撃を敢行、景連は討死にし、反乱は鎮圧された。利家は、そのとき景連方に味方し捕えられた奥能登の土豪・百姓を、釜煎りの刑など厳しい処罰を行った。

長景連の父祖は、室町時代に能登宇出津の柵木城主の一族が、越後国古志郡(現長岡市付近)に移住した家筋で、能登の長氏とは同族でもあつた。天正5年、上杉謙信が能登一国を占領すると、景連は上杉氏の奥能登支配の拠点となつた珠洲郡の正院川尻城に派遣され、同7年まで城番として居住していた。川尻城の位置は、珠洲市正院町川尻に所在し、飯田湾北岸の正院浜を望む標高30メートル前後の半島状台地の最先端部で、現在でも曲輪・土塁・空堀などの遺構が確認できる。

■ 松波城庭園の風雅

国指定名勝の「旧松波城庭園」が遺存する松波城跡は、珠洲郡若山荘の有力武士で、戦国末期に能登守護島山氏一門となつた松波氏の居城である。現在能登町教育委員会によって、城跡の調査と史跡整備が進め

※3 公家の配下にある武士のこと。

られており、発掘調査の結果、城内で発見された深山溪流の石組み意匠(枯山水遺構)を持つ庭園跡が、15世紀前葉頃の建物と一体で構築されたことが明らかとなった。

当時松波氏は、足利將軍家と姻戚関係にあつた、珠洲郡若山荘の莊園領主の有力公家である日野家の家礼^{※3}となつて、奥能登と京都を往来していた。そのことが、京の庭園文化が室町初期に地方に伝わつた稀有な事例として注目されている。

同城もまた、松波川河口の富山湾を遠望できる場所に立地しており、天正5年の上杉氏による奥能登進攻の際に越後勢の攻撃をうけ、城主松波義親は自刃し落城したと伝えられている。

非常時における城砦として、臨時的に使用されてきた中世城郭は、戦国期になると軍事的緊張関係が高まるなかで、城主がそこに日常生活を過ごすようになつていく。このため城郭には、新たに領域支配の拠点としての機能が期待されるようになっていた。

富山湾の彼方に立山連峰の山容を仰ぐことができる奥能登の内浦地域では、富山湾・七尾湾の舟運による生産・流通が盛んであつた。このため沿岸部に在地領主的基盤を持つ城主たちは、その掌握をはかるため、日常的に海域と領内の湊や城下が一望できる海岸段丘上の要地に築かれた城郭の拡張整備を行うようになっていた。しかし戦国末期の越後上杉謙信による能登進攻と、その後の上杉氏の能登支配の過程で、奥能登内浦の城郭は、合戦の渦中に巻き込まれ、落城・滅亡に遭遇したのであつた。



旧能登四郡と奥能登内浦の戦国城郭

東四柳 史明 (ひがしよつやなぎ・ふみあき)

金沢学院大学名誉教授 1948年石川県穴水町生まれ。北陸の中世史・神社史を研究し、多くの自治体史の編纂に従事。著書に『半島国の中世史』(単著)、『地域社会の文化と史料』(編著)などがある。